

とくほう 徳久報

No.0016

発行
平成31年2月

発行元 徳 泉 寺

仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3

(022) 297-4248

三・一一に思いを寄せて

まもなくまた、あの日を迎えます。八年が過ぎてなお東日本大震災の爪痕が多く残る沿岸部。特に福島においては福島第一原発事故の影響が色濃く日常生活に残っている地域が存在します。
そんな人たちに思いを寄せて、真宗大谷派では継続した支援を行っており、住職も全国の仲間とともに活動を続けています。

子どもたちに笑顔でいてほしい

今回は鳥取県に。福島の子どもたちを放射能の不安から離れて過ごしてもらおう一時保養の会で、東北の皆さんの声をお伝えしてきました。真宗大谷派でも全国のお寺やご門徒さん同士のつながりから、現在も保養として子どもたちを受け入れてくれています。保養という呼び名は、初めは一時避難からスタートしましたが、自分たちの暮らしている土地には難があるのか、放射能はやはり危険なのか、ということを含む表現のため改められています。

私たちには放射能がどんな影響を持つかはわからないけれども、不安に感じている人たちに寄り添うような場をもちたい。子どもたちに笑顔で過してもらいたい。そういう場として保養を行ってきています。

「わからなき」を抱え、日々悩んできた

福島県浜通りの方の声です。福島第一原発事故の影響で放射性物質が風や雨と一緒に広く飛



東北こどものつどい (八幡平)

散した後、「大丈夫、ただちに健康に害はありません」という学者さんたちの言葉と、長年原発の危険性に警鐘を鳴らし続けてこられた専門家の言葉の狭間でどう判断することもできない「わからなき」を抱えたとおっしゃっています。生活の中では、避難するのかもしれないのか、食べていいのかだめなのか、洗濯物を干していいのかどうなのか、と様々なことに選択をしなければいけない。答えがわからないけれど選ばなくてはいけない、そういう日々を過ごしてこられた。震災から八年、その不安を口にしようにすれば「まだ気にしているの？」と、語る場所も年々少なくなっているといえます。

あの日、あらわになった私の本性が「あっちの方で良かった」だった

大臣が震災について「あっちの方で良かった」と発言したことで世間が騒然となりましたが、実はそういうものを私も持っているのかもしれない、という会津の方の言葉です。被災地だと言われたくない。風評だと言いたい。震災とはあまり関係がないと思いたかったとおっしゃっています。自分の問題として考えることの難しさ、他人事にしていく日常が震災と事故によってあらわになった。この言葉を聞いた時に、私の中にも同じものがあることを強く考えさせられました。除染や保養に奔走していた福島の仲間があちこちでお話させてもらう時に「福島に立ってほしい」と言っていたのは、このことかとあらためて感じました。

それでも私は今日も「大丈夫だ」と言っていて笑う

「何が大丈夫で何が大丈夫じゃないのかわからない。大丈夫じゃなくても大丈夫と言うしかない。たとえ大丈夫だと思ってもそう口にすることもできない。不安を声に出すべきなのか、心にとどめてこの日々を受けとめていくべきなのか。ここで生きてきた日常をこの国のいったいどれだけの人が知っているのだろうか。中通りの方の声です。私たちはその声にならない声を聞いていきたい。正解はわからないけれども、そういう場を開き続けていきたいと思っています。」



全国の人と笑いあう